特集論文

夫の家事・育児と妻の夫婦関係評価

田中 慶子
（公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員）

1．はじめに

近年、離婚率が上昇傾向にあることや、未婚化（非婚化）の進行、女性の就業率の高まりなどを背景として、結婚がもつ意味や、これまでの夫婦関係のあり方への社会的関心が高まっている。なぜ「家庭内別居」のような状況でも離婚しないのか。改めて結婚の意義や、結婚が個人にもたらす幸せや葛藤に表される、夫婦関係の「質」が問われるようになってきた。

これまでは、性別役割分業型の夫婦関係、すなわち、男性は主たる稼ぎ手として一家を支え、女性は専業主婦として家事・育児（以後、これらをまとめて、ケアとする）を担う、あるいはケアに加えて家計補助者として就労し、家計の責任を負うという性別による分業モデルがあった。夫が経済面で、妻がケアの主たる担い手として、両者の役割が明確で、相対的に夫優位の夫婦関係であり、わが国では高度経済成長期に成立した「近代家族」において実現された（たとえば、落合（1994）など）。しかし、近年は、近代家族における「主婦」のパターン、すなわち結婚・出産を経て非正規で再就職するという、いわゆるＭ字型就業のパターンでだけではなく、結婚・出産にかかわらず、フルタイム就業を継続するという就業パターンが増加してきた。その結果、収入の面では「対等」な、あるいは格差の少ない夫婦も増加してきた。ただし、それに伴う夫婦間でのケアの（再）調整は行われないままで、「男性は仕事、女性は仕事と家事･育児」という妻にとって過重負担の状況が続いていることは周知のとおりである。

1990年代以降、少子化の一要因として、このような性別分業型の夫婦関係、とくに国際的にみて男性の家事・育児時間の少なさが問題視されてきた。「ワーク・ライフ・バランス」「イクメン」等の政策的なキャンペーンを経てもなお、男性のケア負担は非常に低水準である。平成13年と23年の2時点での変化をみると、夫の家事・育児へのかかわり（行動者率）は、女性を1としたとき「家事」時間の夫婦の比率は、両時点とも0.4と半分以下であり、「育児」についても2時点とも0.68と、いずれも夫の家事・育児時間は妻よりも短く、この10年間でも全体ではその比率に変化はなかった。ただし、就業時間も男性の方が1.37と多く、変化がない（内閣府 2014）。

夫の家事・育児を増やすことはケア負担の責任という点からも必要であるし、個々の夫婦内においても家事・育児負担の「不平等」は解消されるべきである。しかし、前述のような夫婦･ジェンダー関係についての社会規範や、家庭にいる時間（物理的条件）の「不平等」が持続している状況において、夫が家事・育児をすることは、妻にとってどのような意味をもつのかということを改めて考えてみたい。

たとえば、マスメディアでは、夫の家事能力が低いことや、家事に対する認識の相違があり、夫が家事をする方がかえって手間になるが、妻が忍耐強く夫を「教育する」ことが重要であると報じられている。夫が家事・育児にかかわることが、妻にとっては家事負担の減少よりも、心理的なス

トレスとなり、夫婦間において新たなコンフリクトが発生していること、すなわち、現状では夫が「単に」家事・育児を増やしたとしても、妻にとっては必ずしも物理的・心理的な負担軽減にはならない状況がある。また、伝統的な性別分業意識をもつ妻は、たとえ夫が家事・育児を行っても、妻自身が（フルタイムで）働くこと、それに伴い、特に子どもに対して家事・育児が疎かになっている、あるいは夫に家事・育児させることに「罪悪感」を感じる。そのため、妻は、夫がやってくれることで減ったはずの負担に代わり、ケアの質を高める、新たな家事・育児を行う。その結果、全体として妻の家事・育児時間が減らない、また分担の割合が変わらないということが起こっている可能性も考えられる[1)]。

これらの実態をふまえて、本稿ではデータの制約上、3年間（2期）という短期間ではあるが、夫の家事・育児（ケア）時間と、夫婦関係や家庭でのケア負担に対する妻の主観的な評価との関連を検討する。具体的には、前年からの夫の家事・育児時間の変化を観察し、夫婦関係満足度、夫に対するイメージ、家族ストレーンで測定される夫婦関係の「質」に対する妻の主観的な評価との関連を分析する。初歩的な分析にとどまるが、結婚満足度のU字カーブに代表される結婚の「質」が変容していくメカニズムを解明する手がかりとして、末子の学齢によるライフステージごとに観察していく。

2．先行研究――夫の家事・育児と妻の評価・夫婦関係の「質」

(1) 夫の家事・育児と妻の期待

夫の家事・育児についての研究は、国際的にみても夫の家事・育児が少ないことを背景に、1990年代以降、多くの研究が行われてきた。夫が家事をしない、夫婦の家事分担が不平等となる要因として、①ニーズ仮説、②時間的余裕仮説、③相対的資源仮説、④イデオロギー仮説の4つに整理される。どの仮説が支持されるのかは、家事か育児かという種類やライフステージによって異なる。多くの場合、時間的余裕仮説は支持されている。すなわち、男性は時間的余裕がない＝長時間労働であるため家事・育児をしない・できないという説明である（たとえば、渡辺ほか 2004, 鈴木 2013）。

直近の「第5回全国家庭動向調査」（2013年実施）では、まだまだ低い水準であるが、若いコーホートでは変化のきざしがみられることが報告されている。夫の家事は、家事の種類によって多少の差異があるものの週1～2回以上遂行したという夫が増加傾向にある。だが家事の総量を100としたときに、妻と夫が分担する割合をみても、妻の分担が圧倒的に多く85%を超えている。「不平等」は持続しているが、夫の家事に対して妻が期待しているかという質問に対しては、「期待する」が35.2%→31.4%と低下し、逆に「期待しない」が64.8%→68.6%と増加しており、若い世代においても夫の家事に「期待しない」という妻が多い。また、夫の家事に対して「満足」は51.8%、「不満」は48.2%とほぼ半数であり、その割合はほとんど変化していない。これらの結果から示されるのは、圧倒的に妻が多くの家事を分担している現状に対して、（理想はともかく、現実には）夫の家事を期待せず、夫との分担が不平等であっても必ずしも不満になっていない夫婦関係のすがたである。ただし、性別役割に対する考え方の質問では、「夫も家事や育児を平等に分担すべきだ」という意見に対して、8割が賛成しており、妻たちが平等な分担を希望していないわけではない（国立社会保障・人口問題研究所 2014）。

(2) 夫の家事・育児が妻の夫婦関係評価に与える影響

では、現状ではとても少ない量ながらも夫が家事・育児を行うことは、夫婦関係の「質」、とくに妻からみた「質」の評価にどのような影響を与えるのだろうか。先行研究では、家事分担の効果については、一貫した知見がみられない。結婚満足感を指標とした研究では、大きく夫の家事・育児が妻の夫婦関係満足度を高めるという知見と、影響はなく、家事・育児がもつ別の側面の効果に注

目する2つの立場に分けられる。

まず、夫の家事・育児が妻の満足度を高めるという知見について、乳幼児期の子どもをもつ夫婦のカップルデータを用いた田中（2010）の分析では、夫の家事・育児行動と妻の評価する夫婦関係満足度は正の相関があることが示された。また、夫の家事遂行は妻の夫婦関係満足度を高める効果を持つ。ただし、それよりも夫の家事への期待と実際のズレ（充足度）の効果が大きいとする報告もある（李 2008）。

他方で、夫の（直接的な）家事遂行は効果がないとする知見では、夫の情緒的サポートの方が、妻の夫婦関係満足感と関連し、その関連は伝統的な性別役割意識をもつ妻において強い（末盛 1999）。また、育児期における夫の育児は、妻の経済力（収入貢献度）別に、夫の行う育児の種類によりその効果は異なるが、妻の夫婦関係満足感を高める。一方、夫の家事については、育児期においても非育児期においても、妻の夫婦関係満足感に影響を与えない（大和 2006）。

以上のように、先行研究では、夫婦関係満足度を指標としても、夫の家事・育児は妻の評価する関係の「質」にどのような影響をもつのかが明らかではない。また、これまでの焦点は主に乳幼児がいる夫婦を対象とすることが多く、他のステージや、結婚満足度以外の指標による関係の「質」の測定は十分ではないだろう。そして、横断データであるため、夫の家事・育児と妻の評価の因果関係、すなわち、夫が家事・育児をするから妻の夫婦関係満足度が高いのか、夫婦関係満足度が高いことは夫婦円満であることを意味し、家事を期待された夫が家事を行っているのか、ということが明らかではない。

そこで、以下ではパネルデータの特性を生かして、夫の家事・育児時間の変化を捉え、3種類の夫婦関係の「質」に関する指標によって、妻の評価への影響を測定する。

3．方法

本稿では、夫婦関係の「質」に関する質問として、夫のイメージに関する質問がある第19回（2011年）から第21回（2013年）までの3時点のデータを用いる。分析対象となる条件は、3回とも有配偶で、核家族世帯にあり、以下の主観的評価項目についての質問に無回答がない者とした。分析対象者は809人となった。妻の平均年齢は40.7歳（範囲29～54歳）、夫の平均年齢は42.8歳（範囲27～70歳）であった。また、子ども人数については、子どもがいない夫婦は11.7%、子ども1人20.4%、子ども2人48.3%、子ども3人以上19.5%であった（子どもの最大数は7人）。

分析に使用する変数は、以下の通りである。

平日と休日の夫の家事・育児時間：

生活時間について、①通勤・通学、②仕事、③勉学、④家事・育児、⑤趣味・娯楽・交際など、⑥睡眠・食事・入浴等の6領域に分け、平日と休日、それぞれについて10分単位で回答してもらった。ここでは、夫の④家事・育児時間を用いる。ただし、家事と育児を分離して尋ねていないこと、夫本人の回答ではなく、妻が回答していることには留意する必要がある。

夫婦関係満足度：

「あなたは現在の夫婦関係に満足していますか」という質問に、「非常に満足している」～「ふつう」～「まったく満足していない」の5段階で尋ねた。満足しているほど得点が高くなるように5点～1点に変換した。

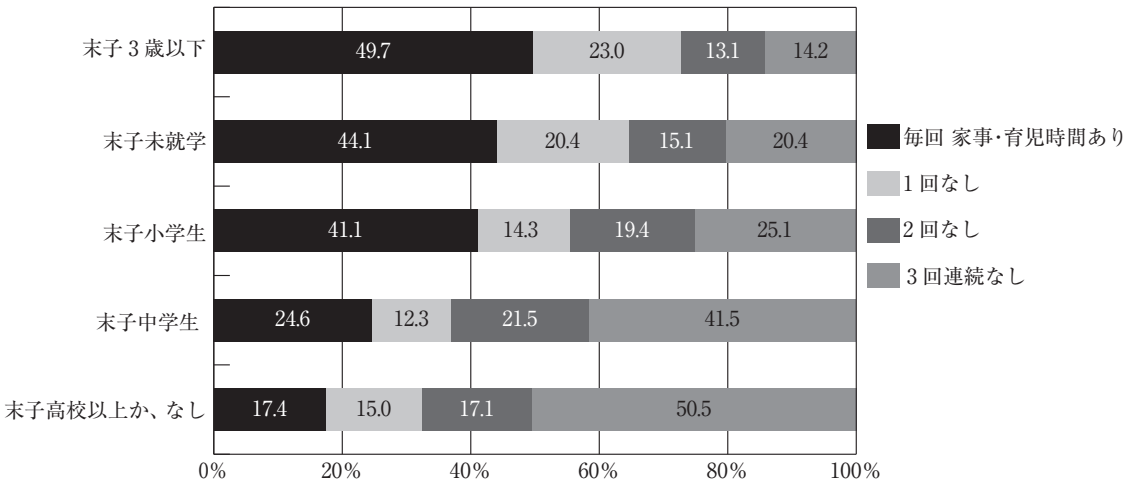
家族ストレーン：

「この1カ月ほどの間に家事・育児・介護などで負担が大きすぎると感じたことはどのぐらいありましたか」という質問に、4段階で何度もあったに3点～まったくなかったに0点を与えるように変換した。得点が高いほど、ケアのストレーンが高い、すなわち家族生活においてケアの負担感が高いことを意味している。

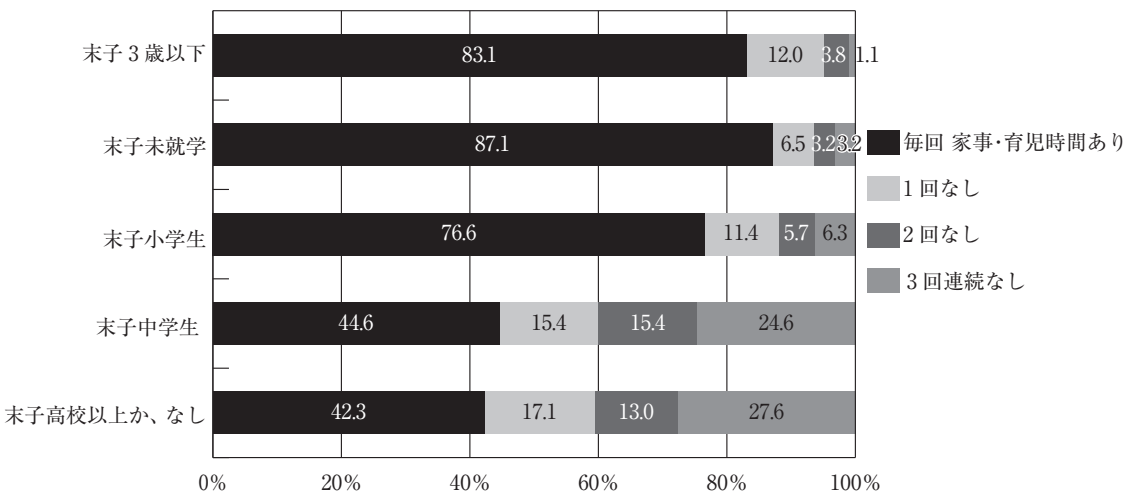
夫のイメージ：

「あなたにとって、今のご主人はどのような存在ですか。以下のイメージについてあなたのお考えを選んでください」という質問に対して、16種類の夫のイメージを挙げ、そう思う～そう思わないまでの4段階でそれぞれについて回答してもらっ

図表-1 末子の学齢別 この3回の夫の家事･育児時間（平日）



図表-2 末子の学齢別 この3回の夫の家事･育児時間（休日）



た。そのうえで、16種類のイメージの中から「あなたのご主人に最も近いイメージはどれですか」と尋ねて1つを選択する質問である。本稿では、16種類すべてをみることは煩雑になるので、全体で最も近いイメージの上位に選ばれる「人生に共に立ち向かう人」と「心の支えになる人」を取り上げる。これらの質問は先行研究の情緒的サポートの質問と内容的に近い、夫婦の情緒面についての指標と考えた。また､「家事や育児に協力的な人」という項目も、「育メン」のイメージの度合いを尋ねていると思われる。この3つの質問を､夫のイメージとして用いた。

他に、統制変数として妻の年齢と子どもの人数を用いた。

４. 結果

(1) 夫の家事・育児時間とその変化

最初に夫の家事・育児時間の状況を確認する。鈴木（2013）を参考に、まずは「ゼロメン」[2]、すなわち家事・育児をまったくしない（家事・育児時間が0分、正確には10分未満）の実情につい

てみていこう。

19回～21回の3回の調査において、3回ともケア時間が0分だった夫の割合は、全体では、平日は32.6%、休日は14.0%であった。一方、3回ともケア時間が10分以上あった人は、平日で33.5%、休日で64.3%である。全体としては、休日は何らかの家事・育児をしている夫が多いが、平日は、3回とも家事･育児をしている夫と、まったく家事･育児をやっていない・できない夫とに分化しているようである。

末子のライフステージ別にみると、平日（図表-1）は、未就学の子どもがいても、3回とも家事・育児が0分という夫が2割近くいる。また､休日（図表-2）をみると、小学生以下の子どもがいる場合は、何らかの家事・育児をしている夫が多く､「ゼロメン」は少ない。末子が中学生より上では、休日でも3回連続なしが増加していることから、夫の休日のケア時間は、家事よりも育児が主であることが推察される。

夫の家事・育児の時間は、子どもの人数やライフステージ（妻の年齢）によって異なることが予想されるため、それらを統制して、平日・休日の平均時間をみてみると、調査回によって数分の違いはあるものの、おおむね平日は38分、休日は2時間40分程度で、3年間でほぼ変化はなかった[3)]。次に、妻の就業状態別に、前と同様、子ども人数と妻の年齢で統制して、この3回の夫のケア時間の推移をみた（図表-3、4）。短期間ではあるが、この3年の趨勢として、妻の働き方にかかわらず、夫のケア時間は増加しているというより、就業状態によっては、むしろ減少傾向にある。妻が正規の夫のケア時間は、平日50分ほど、休日3時間弱である。妻が専業主婦の夫は、平日30分弱、休日は3時間弱と、正規とほぼ変わらない時間である。全体としては平日・休日ともに、夫のケア時間は就業状態による差異はあるが、この3回の間でおおむね変わっていない。先に示したように､「ゼロメン」が多いことから、家事・育児時間がゼロという夫を除いて平均時間を集計した（図表-3､4）。家事・育児時間が0の夫を除くと、平均は大幅に上昇し、妻の就業状態によって差はあるが、おおむね平日は1時間～1時間20分ほど、休日では3時間～3時間半ほどである。家事・育児をしている夫においては、ある程度のケア時間があり、それが持続していることが推察される。

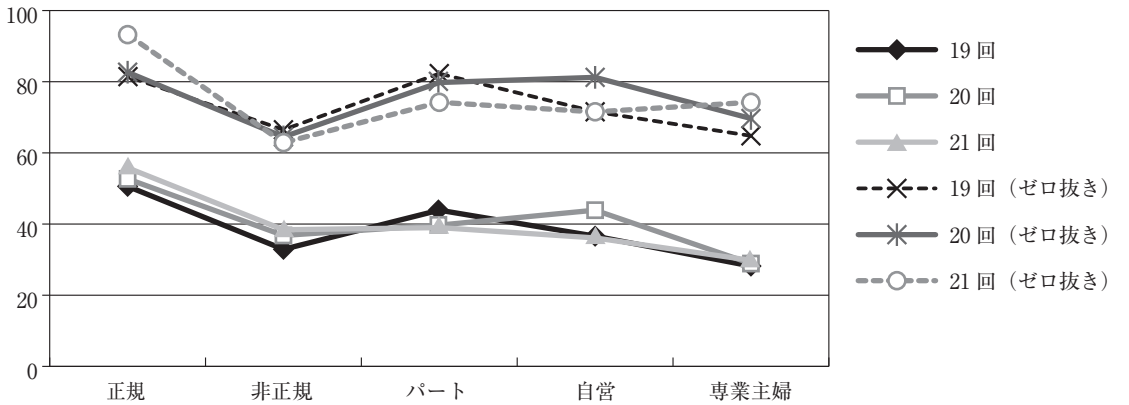
最後に、この2期間での平日の夫の家事・育児時間の増減をみると（図表-5。%は全体を100として求めた)、2期とも「変化なし」が38.7%と最も多くなっている（この中には、0分で変化なしが含まれている)。一方、2期ともに前年よりケア時間が増えている夫は3.3%、逆に減っている夫は4.1%となっている。残りの半数については、調査回によって変化の方向が同じではない。夫のケア時間は、(家事分担の変更等や、所要時間の短縮などによっても変化するが）仕事の状況や、家庭でのニーズによる影響を受けやすい可能性が示唆される。

このように、JPSCの結果からは、①家事・育児をする男性の割合が増加する（「ゼロメン」が減る）こと、②男性の家事・育児時間が増える、といういずれの面からみても､「イクメン」が増えているとは言い難い。男性の家事・育児に対する期待や「イクメン」が定着した現在でも､夫の家事･育児が少ないという実態が確認できたが、そのような中で、夫の家事･育児が増えた、あるいは減ったことと、妻の評価する夫婦関係の「質」の関連を次に検討する。

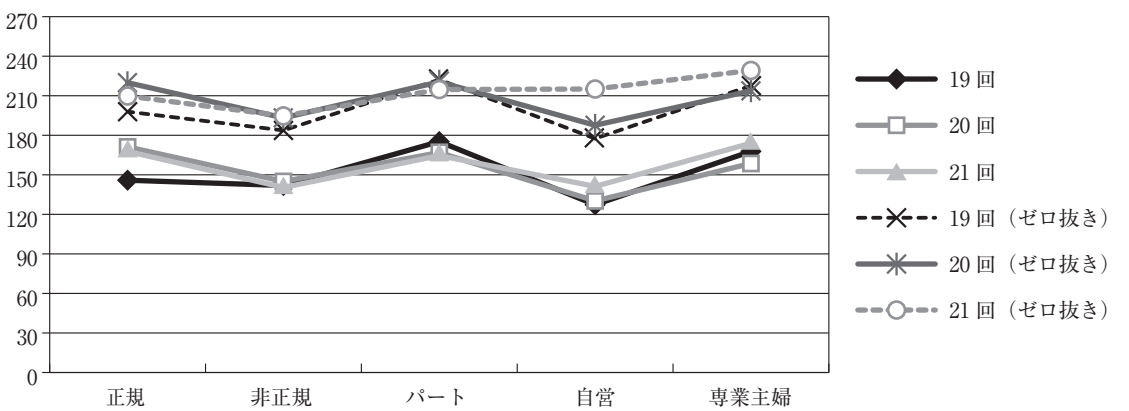
(2) 夫・平日の家事・育児時間の変化が夫婦関係の「質」に与える影響

ここでは､3回分（2期）のデータをプールして、前年よりケア時間が増えた夫／変わらない夫／減った夫の3グループに分けて分析を行う。ここでは1人につき2回の移動経歴を取り扱うことになり、たとえば、図表-5で示した移動のパターンで考えると、19回→20回で「マイナス」、20回→21回で「変化なし」という人であれば､「減った夫」と「変わらない夫」に分類され、該当調査回ごとの回答を「前年」と「当年」として、それぞれの妻の夫婦関係の質に対する評価をみていく。なお、前年より夫のケア時間が増えたのは381対象､減ったのは386対象､変わらないのが851対象となった。

図表-3 妻の就業状態別 夫の家事･育児時間（平日･分）



図表-4 妻の就業状態別 夫の家事･育児時間（休日･分）



図表-5 夫･平日の家事･育児時間の変化　（%）

		20 回→ 21 回						
		31 分以上マイナス	30 分以内マイナス	変化なし	30 分以内プラス	31 分以上プラス	計	n
19 回→ 20 回	31 分以上マイナス	1.2	1.5	4.9	1.9	3.6	13.1	106
	30 分以内マイナス	0.4	1.0	4.6	4.0	1.5	11.4	92
	変化なし	1.6	2.3	38.7	3.3	5.2	51.2	414
	30 分以内プラス	1.7	5.6	3.0	0.9	0.7	11.9	96
	31 分以上プラス	7.0	0.9	2.8	0.5	1.2	12.5	101
	計	12.0	11.2	54.0	10.5	12.2	100.0	809

妻の夫婦関係の「質」に関する指標の相関係数を、図表-6に示した。係数はいずれも有意で、同一指標の調査回ごとの係数は、強い相関がみられ、r=.6 ～.7となっている。指標同士の相関も有意ではあるが、夫婦関係満足度とケアのストレーンは（調査回にもよるが）r= －.19程度と低く、夫のイメージの3種類の間の相関もやや低めである。

ここでも、前と同様に妻の年齢と子ども人数で統制して、末子の学齢別にそれぞれの指標の得点を算出した[4)]。学齢ごとの人数は、末子3歳以下183人、末子未就学93人、末子小学生175人、末子中学生65人、末子高校以上か子どもなし293人となっている。

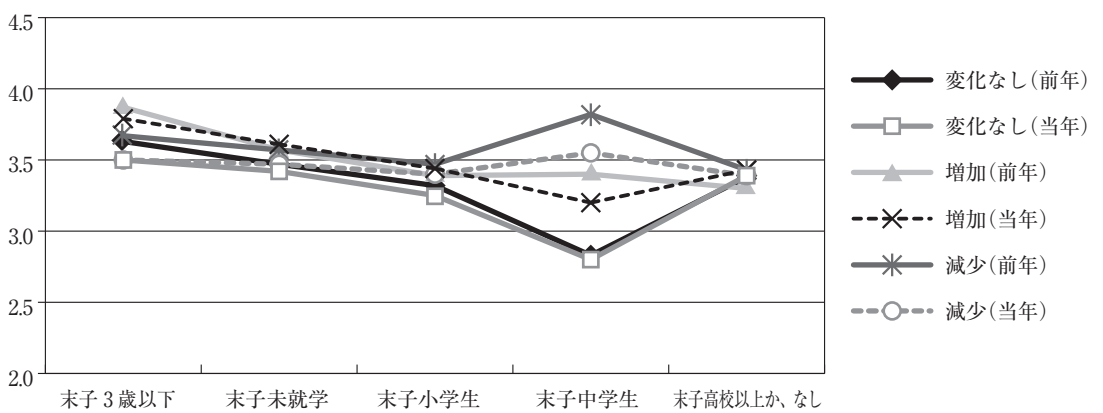
最初に、夫婦関係満足度をみると（図表-7）、

図表-6 夫婦関係の「質」に関する指標の相関係数

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	19回 夫婦関係満足度													
2	20回 夫婦関係満足度	.712**												
3	21回 夫婦関係満足度	.629**	.721**											
4	19回 人生に共に	.505**	.484**	.463**										
5	20回 人生に共に	.467**	.547**	.469**	.611**									
6	21回 人生に共に	.448**	.530**	.582**	.614**	.634**								
7	19回 心の支え	.645**	.575**	.515**	.633**	.542**	.548**							
8	20回 心の支え	.551**	.646**	.560**	.543**	.660**	.591**	.680**						
9	21回 心の支え	.512**	.593**	.660**	.507**	.558**	.705**	.665**	.720**					
10	19回 家事･育児に協力的	.385**	.377**	.297**	.327**	.306**	.297**	.424**	.344**	.347**				
11	20回 家事･育児に協力的	.346**	.429**	.339**	.327**	.389**	.384**	.399**	.460**	.416**	.740**			
12	21回 家事･育児に協力的	.332**	.428**	.406**	.361**	.397**	.444**	.385**	.430**	.503**	.711**	.752**		
13	20回 ケアのストレーン	−.197**	−.304**	−.252**	−.099**	−.214**	−.158**	−.140**	−.204**	−.173**	−.167**	−.191**	−.170**	
14	21回 ケアのストレーン	−.189**	−.230**	−.283**	−.089*	−.167**	−.148**	−.106**	−.141**	−.173**	−.129**	−.113**	−.160**	.522**

注: ** p<.001　* p<.005

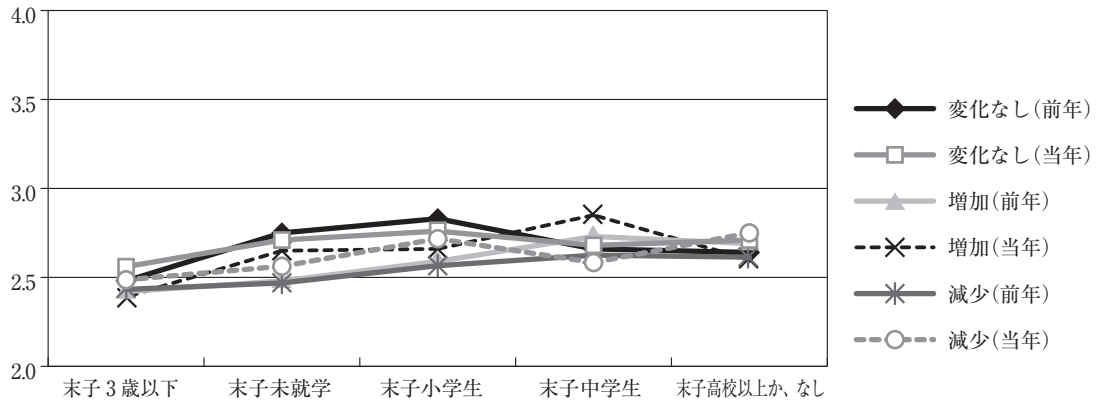
図表-7 末子学齢別 夫の家事･育児時間の推移別 夫婦関係満足度



注: 範囲は1点（まったく満足していない）～5点（非常に満足）
　　妻の年齢、子ども人数をコントロールした

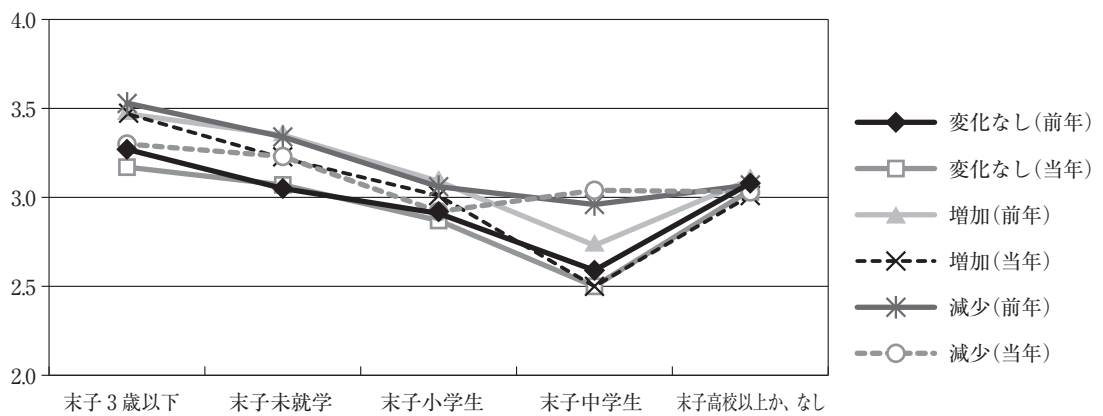
全体のグラフの形として、末子の学齢が高いほど≒結婚年数が長いほど、夫婦関係満足度が下がるという傾向が確認できるが、末子中学生で、やや傾向が異なる[5)]。夫のケア時間の増減に注目すると、前年より夫のケア時間が増加した妻の夫婦関係満足度は、末子の学齢によってばらつきがある。全体の結果は3.54→3.55と上がっているものの、あまり変化がない。末子高校以上か子どもなしでは、3.30→3.43と少し上昇しているが、末子3歳以下では3.87→3.79と満足度は低下している。一方、夫のケア時間が減少した妻の夫婦関係満足度は、全体では3.56→3.45となっており、いずれの学齢でも妻の夫婦関係満足度は下がっている。また夫のケア時間が「変化なし」では、全体が3.37→3.33と低下していた。以上のように、夫の家事・育児時間が増えると、妻の夫婦関係満足度は高くなる傾向があるが、末子の学齢、すなわち家庭内でのケアのニーズの状態によっては、夫のケア時間が増えても、当年に満足度が上がるとは必ずしも言えないことが明らかとなった。末子3歳以下については、夫の家事・育児が妻の満足度を高める効果よりも、ハネムーン効果が逓減する効果の方が大きい可能性や、夫が家事・育児時間を増やしたのは、短期的に妻の不満が高まった結果である可

図表-8 末子学齢別 夫の家事･育児時間の推移別 夫のイメージ得点（人生に共に立ち向かう人）



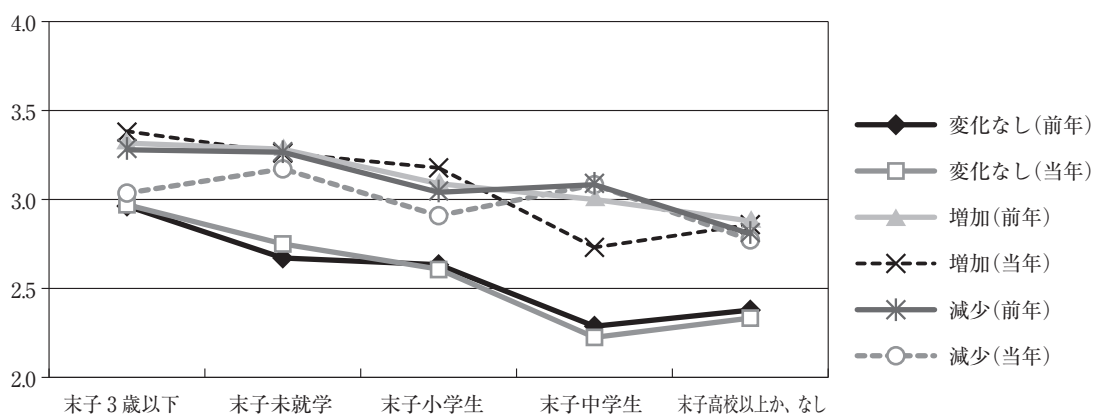
注: 範囲は1点（そう思わない）～4点（そう思う）
　妻の年齢、子ども人数をコントロールした

図表-9 末子学齢別 夫の家事･育児時間の推移別 夫のイメージ得点（心の支えになる人）



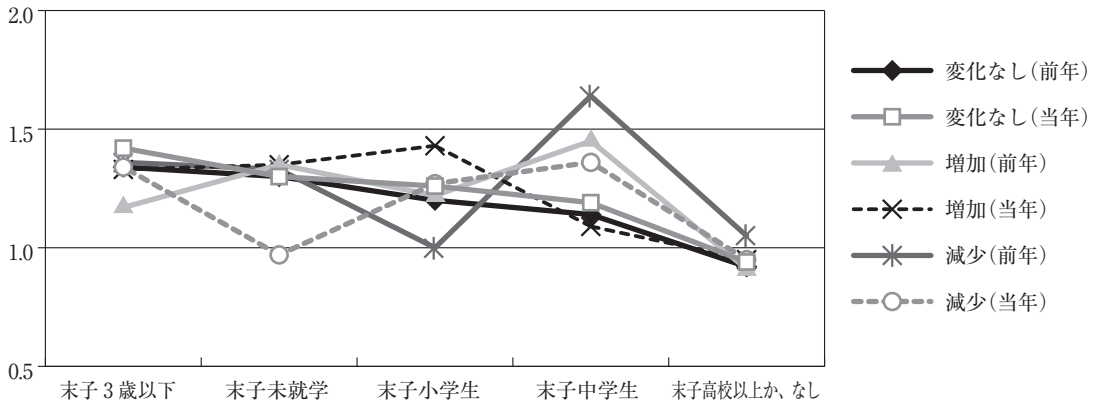
注: 範囲は1点（そう思わない）～4点（そう思う）
　妻の年齢、子ども人数をコントロールした

図表-10 末子学齢別 夫の家事･育児時間の推移別 夫のイメージ得点（家事や育児に協力的な人）



注: 範囲は1点（そう思わない）～4点（そう思う）
　妻の年齢、子ども人数をコントロールした

図表-11 末子学齢別 夫の家事･育児時間の推移別 ケアのストレーン



注: 範囲は0点（まったくなかった）～3点（何度もあった）
　妻の年齢、子ども人数をコントロールした

能性などが考えられる。

次に、夫のイメージについて、「人生に共に立ち向かう人」（図表-8）、「心の支えになる人」（図表-9）、「家事や育児に協力的な人」（図表-10）の順にみていく。グラフの軌跡をみると、「人生に共に立ち向かう人」というイメージは、他の2つと比較して得点が低めであるが、末子の学齢≒結婚年数による変容が少ない。他方、「心の支えになる人」は結婚満足度と同様、学齢が高くなるほど低下していく形状となっている。「家事や育児に協力的な人」については、やはり学齢が高くなるほど低下する傾向がみられるが、夫のケア時間の推移3グループでの差が大きいことが特徴的である。

夫のケア時間が増加したグループ全体での得点の変化は、「人生に共に立ち向かう人」は2.56→2.57、「心の支えになる人」は3.22→3.14、「家事や育児に協力的な人」は3.12→3.14であった。「心の支えになる人」という評価は、ケア時間は増加しても、いずれのステージでも低下していることは興味深い。また、「家事や育児に協力的な人」という評価は、（短期的な）ケア時間の増加ではすぐに変化しないことが推察される。

一方、夫のケア時間が減少したグループに注目すると、「人生に共に立ち向かう人」は2.53→2.62、「心の支えになる人」は3.24→3.11、「家事や育児に協力的な人」は3.10→2.97となった。ケア時間が減少すると、「家事や育児に協力的な人」という夫のイメージはやや低下する。しかし、「人生に共に立ち向かう人」の評価は、多くのステージで上がっている。

変化なしのグループ全体では、「人生に共に立ち向かう人」は2.66→2.69、「心の支えになる人」は3.03→2.98、「家事や育児に協力的な人」は2.54→2.51となった。「心の支えになる人」というイメージは、学齢が若い末子未就学まではわずかに上昇しているが、末子小学生以上では低下している。また、「家事や育児に協力的な人」のイメージ自体は変化がないが、（「ゼロメン」が多く含まれるため）いずれのステージでも評価が低い。

最後に、ケアのストレーンについてみると（図表-11）、ケア時間が増加したグループ全体では、1.16→1.26、減少したグループでは1.21→1.18、変化なしのグループでは1.09→1.13であった。夫のケア時間が増加したグループでは、妻のケアのストレーン（負担感）は高まっており、夫のケア時間が減少したグループでは負担感が低下している結果となった[6]。変化なしのグループはケアのストレーンの得点が低く、（子ども人数で調整しても）妻がケアを負担に感じていないため、夫のかかわりを期待しない（ニーズが少ない）可能性が示唆される。

５．まとめと今後の課題

本稿では、前年からの夫の家事・育児時間の変化を観察し、夫婦関係満足度、夫に対するイメージ、家族ストレーンで測定される、夫婦関係の「質」に対する妻の主観的な評価との関連について分析を行った。夫が「イクメン」になる、すなわち家事・育児時間が前年より増えることで、妻は夫婦関係や夫の評価をどのように変えるのかを観察すると、次の3点の知見が得られた。①夫婦関係満足度は高まる傾向、②「家事や育児に協力的な人」という夫のイメージはほぼ変わらないが、「心の支えになる人」というイメージは低下する、③妻のケアのストレーンは、夫のケア時間が増えた当年は高くなっていることである。

相対的に夫が家事・育児を増やすことは、夫婦関係の「質」を高めるというプラスの側面だけでなく、夫婦関係の「質」が低下してきた（心の支えと思えなくなってきた）ために、家事・育児による「補塡」の機能を果たしている可能性がある。一方で、夫の家事・育児時間が減っても、関係の「質」の低下と直結しているとも限らないことが確認できた。夫の情緒的サポートは、夫からの家事・育児が減っても、妻の認知によって調整されることで（我慢やあきらめで期待を下げる／あるいは忙しい夫であるからやむを得ないと考える、など）、代替的な資源になることも予想される。

また、末子の学齢によるライフステージによって、変化の趨勢が異なっていた。末子中学生の結果には留保が必要であるが、夫が家事・育児をすることが、夫婦関係の「質」に与える影響は、ステージによって異なる意味がある可能性を確認できた。宇都宮（2010）は、配偶者との関係性の長期的な持続のあり方には5つのパターンがあり、それは「コミットメント志向性モデル」によって説明できるとしている。すなわち、「制度維持」レベル、「平穏維持」レベル、「探求維持」レベルの探求が個人によって異なり、また時間の流れとともに3つのレベルの循環の中で探求ルートが形成されるという。このモデルに従えば、「無自覚」や「制度維持」において夫の家事・育児がどのように位置づけられているのか、「探求維持」レベル（関係性を問い続けたい）を重視する時期や場面はいつであるのかといった、夫婦関係の発達的変化を捉えていくことで、個人間の差異とステージでの差異を識別していくことができるだろう。

本稿では、妻の回答する夫の家事・育児時間であること、また、質問の制約上、短期間での観察にとどまっている。夫の家事・育児時間が増えたといっても、30分程度の増加である場合が多く、ケア時間は調査回ごとで変動している。夫のケア時間の増加が、当年の妻の評価としてすぐに反映されるとは限らないため、データをさらに積み上げて、時間を経た効果についても検証が必要となる。また、ここでは、妻の家事・育児時間や、夫の就業（労働時間）については、何も考慮していないが、夫の家事・育児時間の確保は、長時間労働によって実現できない側面もある。妻と夫が、ワーク・ライフ・バランスの調整をどのように行っているのか。また、夫婦間での調整がどのように行われ、中長期的に個人のwell-beingや職業キャリアにどのように影響を及ぼすのか。JPSCにある多様な情報とパネルの特性を生かした分析も可能であろう。今後の課題としたい。

注

1）女性の家事時間は、近年、便利な家事家電や「中食」等が増えていても、ほぼ横ばいであることが知られている。

2）「ゼロメン」とは、育児に積極的な「イクメン」に対する用語として、『AERA』2013年11月25日号の「少子化の元凶は育児なし自慢の「ゼロメン」」中で用いられた造語。

3）妻が回答する夫の状況であるため、実際に夫は妻が見ていないところで家事・育児を行っていて、夫本人が回答すれば、もっと長時間になる可能性もあるが、先行研究で報告されている夫の家事・育児時間をふまえれば、妻の回答もほぼ実態を捉えているだろう。

4）反復測定による一般線形モデルによって推計した。検定の結果等は、ここでは省略し、記述的な観察（値の差の比較）にとどめる。

5）末子中学生では人数が少ないため、今後、人数が増えた際に再度確認したい。

6）この結果の解釈については、質問が「この1か月ほどの間に」と限定しているため、1年間の範囲ではなく、短期的に妻の家事・育児・介護の負担が大きくなったことで、夫のケアへのニーズが（一時的にせよ）高まった結

果であると考えられる。夫のケア時間が減少したグループについては、その逆（妻の負担が減ったから、夫のケア時間を減らせた）が予想されるが、今後、詳細を検討していきたい。

文献

李基平，2008,「夫の家事参加と妻の夫婦関係満足度――妻の夫への家事参加期待とその充足度に注目して」『家族社会学研究』20（1）: 70-80.

宇都宮博，2010,「夫婦関係の発達・変容――結婚生活の継続と配偶者の関係性の発達」岡本祐子編『成人発達臨床心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版，187-195.

落合恵美子，1994,『21世紀家族へ――家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣.

国立社会保障・人口問題研究所，2014,『第5回 家庭動向調 査』（http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ5/NSFJ5_top.asp）.

末盛慶，1999,「夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感――妻の性別役割意識による交互作用」『家族社会学研究』11: 71-82.

鈴木富美子，2013,「育児期における夫の家事・育児への関与と妻の主観的意識――パネル調査からみたこの10年の変化」『季刊家計経済研究』100: 19-31.

田中恵子，2010,「父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性」『人間文化研究科年報』25: 125-134.

内閣府，2014,『男女共同参画白書 平成26年度版』（http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h26/zentai/html/honpen/b1_s00_01.html）.

大和礼子，2006,「夫の家事・育児参加は妻の夫婦関係満足感を高めるか?」西野理子･稲葉昭英･嶋崎尚子編『第2回家族についての全国調査（NFRJ03）第2次報告書 No. 1――夫婦、世帯、ライフコース』17-33.

渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編，2004,『現代家族の構造と変容――全国家族調査[NFRJ98]による計量分析』東京大学出版会.

たなか・けいこ　公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員。主な論文に「「友人力」と結婚」（佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編『結婚の壁――非婚・晩婚の構造』勁草書房，2010）。家族社会学専攻。
（tanaka@kakeiken.or.jp）